

「ほら。濡れてきてませんか？」

「.....っ、見てないのに.....そんなこと.....」

「わかりますよ。優香さんの身体、昨日でだいたい“反応のスイッチ”は覚えましたから」

そう言って、彼はあくまで声だけで畳みかける。

「“耳のすぐ横で囁かれると、すぐ腰が浮き始める”」

「“乳首って言葉を聞いただけで、下がジンと熱くなる”」

「“言葉で責められてると、自分からお尻を動かし始める”」

「.....やめてっ、やめてってば.....！」

「なら、“声だけでイきそう”って、自分で言ってください」

「.....っ.....そんな.....っ.....言えるわけ、ない.....！」

「なら、寸止めします」

「.....っえっ.....？」

「言葉、止めます」

「っ.....や、やだ、やだっ！ やだってば.....！」

「じゃあ？」

「.....っ、こ、声だけで.....イきそう.....っ.....っ！」

「はい、よく言えました。じゃあ、“イかせてください”は？」

「.....っ、いかせてください.....っ.....！」

「どこで？」

「.....っ、声だけで.....っ、お願いします.....っ.....！」

「なら、ご褒美です——」

耳元に、ねっとりとした囁きが、落ちる。

「“牛乳、搾られてうれしいです” って、言ってみて」

「な、なにっ……やだ、ムリムリムリ……っ！」

「言わないと、また寸止めです」

「……っ、っ……っく……っ、し、搾られて……うれしい……です……っ」

「ふふ……素直な乳搾りちゃん、偉いですね」

「もお……やめてえ……！」

「じゃあ最後。“声だけで搾られてます” って、叫んでください」

「や、や、無理、でも……でも、もう……！」

「……言っ……て……ごらん？」

「っ……声だけでえ……っ、搾られてますっ……！」

その瞬間、身体の奥でなにかが爆ぜた。

全身が、震える。

耳の奥に直接触れたような甘い声に、身体が――